様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：２４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３１９６

研究課題名（和文）地理・歴史・人からとらえる沖縄の慰霊碑

研究課題名（英文）Historical geographies of memorial spaces about the battle of Okinawa

研究代表者
上杉　和央（UESUGI, Kazuhiro）

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：７０３７９０３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、沖縄県内の沖縄戦に関する慰霊碑／慰霊祭の基礎的な調査を実施するとともに、地理・歴史・人といった視点から慰霊碑や慰霊祭をとらえ直していきました。沖縄県では特に本島南部や座間味村を調査したほか、沖縄（琉球）の葬送儀礼や宗教の検討、県外の遺族団との関係、海外戦没者のための慰霊墓参団の派遣といった、多様な検討を通じて、戦没者慰霊が時と場、そして人との関係性のなかで構築されていることを明らかにしました。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、沖縄戦の慰霊について、「戦後」・「沖縄」という時間・空間のなかで詳細に検討すると同時に、その時間軸・空間軸を広げ、より広い範囲から検討を加えることで、沖縄戦の慰霊が、歴史や地理のなかにどのように位置づくのか、という点に接近したことが重要な成果となります。
戦後74年となり、戦争体験を語ることのできる体験者はどんどんと少なくなっており、記憶から記録へという動きが加速しています。その中でどのような視点で記憶・記録を読み解くか、その一端を示すことができたと考えています。

研究成果の概要（英文）：In this research, we tried to clear the diversities of historical geographies of the monumental space about the battle of Okinawa. Adding to the fundamental researches about war monuments and monumental services in Okinawa islands, especially in the south parts of Okinawa main island and Zamami island, we researched the histories and geographies of the funeral rituals in Okinawa, the relationship between the local people and the surviving families living in other prefectures, and the dispatches of survivors to the South Sea Islands.

研究分野：歴史地理学

キーワード：慰霊碑　沖縄　歴史　空間　葬送　慰霊祭

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1990 年代以降、地理学や歴史学では、場所をめぐる記憶や記念碑（モニュメント）に関する議論が盛んになされるようになり、さまざまな事例が検討されるようになった。そのなかで沖縄戦の戦没者慰霊の歴史的変遷は、主要な研究対象の１つとなり、2000 年代以降、急速に研究蓄積が進んできた。それらは大きく、研究①「戦没者慰霊碑に関する基礎調査の遂行」、研究②「慰霊史の通時的理解」（沖縄における慰霊の歴史）、研究③「慰霊史の共時的理解」（沖縄県外の動きとの比較）という 3 つの研究軸に分けられる。ただし、個別の研究蓄積が進むにつれて、①～③をあわせた総合的な視点で沖縄の慰霊史をとらえるまでには至っていないという課題が浮かび上がってきていた。

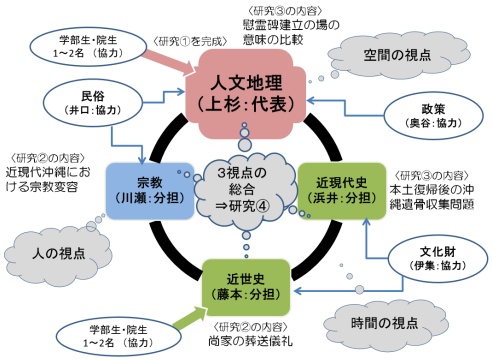
本研究のメンバーは、それぞれの分野から調査を進めてきたが、こうした課題を前に、地理学・歴史学・宗教学・民俗学といった多様な研究分野ごとの特性を活かして沖縄の慰霊について総合的に調査することが、重要であると考えるに至った。

２．研究の目的

こうした課題をふまえ、本研究は、研究①「戦没者慰霊碑に関する基礎調査の遂行」、研究②「慰霊史の通時的理解」（沖縄における慰霊の歴史）、研究③「慰霊史の共時的理解」（沖縄県外の動きとの比較）という 3 つの研究軸を深化させると同時に、その成果を総合的にとらえ、研究④「沖縄の戦没者慰霊を歴史・地理に位置づける」ことを目的とした。

３．研究の方法

研究組織は上杉和央（地理学）を研究代表とし、浜井和史（帝京大・現代史）、川瀬貴也（京都府立大・宗教学）、藤本仁文（京都府立大・近世史）を研究分担者とした。さらに、井口学（沖縄民俗学会・民俗学）、伊集守道（那覇市文化財課・文化財学）、奥谷三穂（京都府立大・政策学）を研究協力者に迎え、研究視点の多角化を企図した。



研究組織内で情報共有をおこなった。

研究①～④いずれにも共通するのは、史料収集、聞き取り、現地調査の重要性である。これらは個別でおこなうとともに、沖縄居住の井口より、適宜、情報を提供してもらい、研究組織内で情報共有をおこなった。

研究①については、上杉が主に担当するが、400 以上存在する慰霊碑の調査を一人で実施することは難しい。とくに、沖縄で「慰霊の日」として定められている 6 月 23 日に慰霊祭を実施する地域が多く、慰霊祭の調査は人手が必要となる。そこで、研究メンバーは可能な限り 6 月 23 日前後は沖縄に集まり、慰霊祭の調査を分担しておこない、参加者から慰霊祭の歴史や慰霊碑建立についての情報を求めた。

研究②については、川瀬・藤本・井口・伊集が主に担当した。戦没者の慰霊を葬送儀礼の変遷のなかでとらえ直すことで、その特徴を浮かび上がらせることを目指し、尚家文書や新聞・写真資料などから琉球・沖縄の葬送儀礼をとらえることにした。

研究③については、上杉・浜井が主に担当し、加えて奥谷が「京都の塔」の検討をおこなった。上杉は県内の差異、奥谷が都道府県間の交流、浜井が海外への慰霊墓参との関係を取り上げ、スケールの異なる比較を試みた。

研究④については、研究期間の 3 年間、毎年、研究メンバー全員が集まる集中的な研究会を実施し、それぞれの成果を報告し、地理・歴史・人といった視点を総合して沖縄の慰霊を位置づける試みをおこなった。こうした議論の成果は、それぞれの研究にフィードバックさせることで、それぞれが個別の視点の分析ではない総合的な分析枠組みを意識することとなった。

４．研究成果

（１）研究①「戦没者慰霊碑に関する基礎調査の遂行」に関する成果

本研究期間中に、これまで十分に調査できていなかった八重瀬町、南風原町、座間味村、南大東村の調査に赴き、また研究蓄積のある糸満市についてもすでに失われた慰霊碑の調査と現在の慰霊祭の状況についての調査を実施した。

このうち、南風原町では町の慰霊碑である慰霊祈和之塔のほかに従来、あまり取り上げられることのなかった兼城区の慰霊塔についても調査をした。この成果を研究会で報告し、地区スケールと町スケールの慰霊の差についての指摘を得たため、そうした視点からとりまとめることができた。また、慰霊碑建立のキーパーソンについても検討を進めることができた（上杉 2018）。

座間味村の慰霊碑については、これまで十分な基礎調査がなされていなかった。そのため、現地調査によって、慰霊碑建立や慰霊祭の状況について、可能な限りの情報を収集し、その結果を報告することができた（上杉 2019）。

南大東村についても、これまで本格的な調査がなされていない場所であった。沖縄本島や八重山諸島とは遠く離れた大東諸島は、一般にイメージされる「沖縄戦」とは大きく異なる戦争体験がある。そうした点をふまえて現地調査をおこなった。糸満市にある魂魄之塔よりも早く建立された沖縄戦関連慰霊碑の最初の慰霊碑は南大東島にある。それを含めた調査をおこない、「沖縄戦」や戦没者慰霊を多角的にとらえるために大東諸島はきわめて重要な場所であることを確認した。ただし、碑文の一部を判読することができなかったこともあり、現段階では成果としてまとめることは断念し、継続課題とした。

八重瀬町については、研究③で紹介する。

（２）研究②「慰霊史の通時的理解」に関する成果

研究分担者の川瀬は、主に沖縄（琉球）における仏教について調査し、琉球王朝から現在に至る仏教そのものの歴史及びその研究史をまとめた（川瀬 2017）。そこで明らかになったのは、近世になって寺請制度を持った日本本土とは違う仏教の展開であった。仏教受容の経緯からして、琉球の仏教は「鎮護国家的」な性格が強く、民衆への浸透よりは国家との結びつきが強固で、それが原因で仏教が民衆に普及しなかったと言われる。翻って、近現代の沖縄における仏教の特色は、檀家制度のしがらみがなかったせいで、当初から「通仏教的」「超宗派的」な寺院連合と活動がおこなわれてきたことである。例えば戦後まもなく遺骨収集の活動にともに従事したり、福祉事業を合同でおこなったりするなど、沖縄の仏教界は、宗派色を出さず福祉や教育、文化などに関する活動を通じて、戦後復興の道を探ったとも評せる。川瀬は現地のフィールドワークにおいて、何軒かの寺院を訪問しインタビューすることにより、現在の沖縄仏教界の様相を確認した（川瀬 2018）。また、仏教のみならず、新宗教も沖縄の慰霊事業に深く関わっており、新日本宗教団体連合会（新宗連）の青年部の人にインタビューし、その「宗教協力」についても調査をした（川瀬 2019）。

研究分担者の藤本は、『尚泰侯実録』の簡単な記述以外はほとんど基礎的事実すら不明であった、明治 34 年（1901）におこなわれた最後の琉球国王・尚泰の葬儀に関する研究をおこなった。まず東京で死去した尚泰は、琉球国王が初めていわば「他国」で死去した事例にあたり、炎天下の中わざわざ首里までその遺骸が運ばれて、古式に則って葬儀がおこなわれ玉陵に葬られたことを明らかにした（藤本 2017）。さらに当時東京の尚邸に勤めていた奉公人の証言から、尚泰死去から遺骸の移送、さらに葬儀の様子の具体像を明らかにした（藤本 2018）。最終年度はこれらの成果を踏まえつつ、首里にて尚家関係者・旧士族が葬儀を準備していく過程やその制度・機構、あるいは首里尚家邸内の神事・位牌祭祀、玉陵での洗骨儀礼、葬儀当日の様子、大正・昭和の尚家関係者の葬儀などを具体的に分析し、尚泰の葬儀についての全体像を解明した（藤本 2019）。これらの分析を通して、未解明であった琉球国王尚家の葬送儀礼の具体像を解明するとともに、近代沖縄の政治・社会の中で旧琉球国王尚家の果たした役割や位置づけについても部分的に明らかにすることができた。

研究協力者の伊集は鈴木悠と共に葬送儀礼の変遷を明らかにし、戦没者慰霊の特徴を浮かび上がらせるため、琉球国王の末裔である尚家当主の葬送儀礼を検討することとした。なかでも琉球王国から沖縄県となった際、近代化が顕著であった尚典の葬送儀礼を素材とした。尚典は琉球王国最後の国王尚泰の嫡子として 1864 年に誕生し、琉球処分後の 1920 年に首里の尚家邸で逝去した。琉球王国時代に次期国王として生まれ、沖縄県時代に逝去した尚典の葬送儀礼は、両方の時代的特徴を併せ持った儀礼内容であった。王国時代の慣習を多分に残す尚泰の葬送儀礼を継承しつつも、民心の変化に伴う祭祀施設の減少や軍人の参列など近代的な変化があったことを指摘した。沖縄の葬送儀礼の変遷を知るうえで、1 つのターニングポイントとなる事例を提供することができた（伊集・鈴木 2019）。

葬列に参加する軍人（那覇市歴史博物館蔵）

研究協力者の井口は、沖縄戦当時とその直後に、戦死者の遺骨や遺体がどのように葬られたのか、沖縄戦証言集を中心にその確認と検討をおこなった（井口 2019）。まず沖縄戦当時の葬法について、証言で多いのは埋葬で、洗骨をおこなう地域では埋葬への忌避感があるなかで、やむを得ずおこなわれたものであることを指摘した。そのなかでも、急ごしらえで棺を作る、あるいは遺体の上に瓦を載せて「屋根」をつけたとの証言から、洗骨を前提とする風葬への意識がうかがえた。ただ激戦地となった沖縄島南部を中心に、埋葬すらできない戦没者の多さがあり、こうした過酷な状況下で、そのまま白骨化したもので、「野ざらし」というべきものであった。終戦後の戦没者の葬法については、遺骨の洗骨が確認できる一方で、複数の遺体をまとめて葬る際に、焼骨並びに火葬との手段が用いられる向きがあった。また 1950 年代以降には、身元の分からない戦没者の遺骨は、各地で地域の人々が主体となって洞窟等にまとめられた。そのなかで激戦地となった地域では、地元で収集された遺骨に、身内の者も入っているとの意識を持つ場合があった。そのなかで、地域との「有縁」がある遺骨であっても、個々の遺族に

戻せない遺骨は集めて焼骨し、地域の納骨堂（慰霊塔）に納めていることを指摘した。以上のこれらの葬法は、戦時中から終戦直後にかけての厳しい状況下での「やむを得ずの葬法」ではないかとし、沖縄戦へのアプローチでは、当時のあり方を踏まえて議論する余地はまだ多いのではないかと提起した。

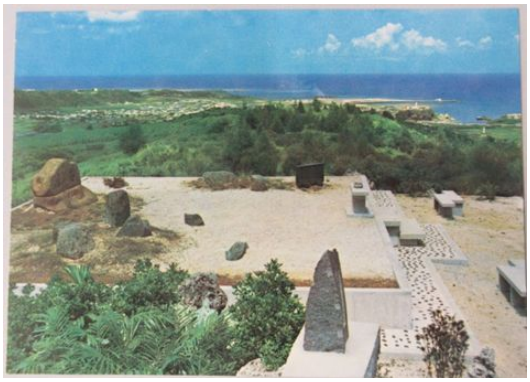
（３）研究③「慰霊史の共時的理解」に関する成果

研究③は３つのスケールで研究が展開した。

沖縄県内の異同については、研究①に連動する形で進められた。なかでも今帰仁村の調査では、合併以前の旧町村（旧東風平町、旧具志頭村）での慰霊史が異なっていること、そして慰霊主体によって慰霊に関する時期的な差異がみられることが明らかとなった。このような動きは、隣接する糸満市域の慰霊碑・慰霊祭の地域史とも比較することで、沖縄県南部の微細な慰霊史／慰霊誌を描くことができる。そうした点を意図して、論文を準備し『人文地理』に投稿、掲載された（上杉 2018）。

また、糸満市域のなかで慰霊碑が残されている割合の小さい旧兼城村域に焦点を当て、なぜ残されることがなかったのかという点についても資料と現地調査をもとに可能な限り明らかにした（上杉 2019）。

こうした 2 つの検討は、慰霊という営みが政治・行政領域と無関係ではなく、その意味で否応なく政治性を帯びるものであることを示している。



「京都府出身沖縄戦没者慰霊塔京都の塔」の絵葉書

（京都府立京都学・歴彩館蔵）

研究協力者である奥谷は、2015 年から 2018 年まで実施した「沖縄京都の塔」の調査結果を基に、記憶の継承における場の意義と交流のしくみについて考察した。考察は次の 3 点を論点として進めた。①「沖縄京都の塔」が建立されている嘉数の丘という「場」の神聖性について、②その「場」に持ち込まれた京都の文化性と建立者の意図、③記憶の継承のしくみとしての嘉数地区住民と京都の塔関係者との交流の歴史についてである。多くの都道府県自治体は糸満市摩文仁に慰霊碑を建てているが、「京都の塔」は京都府出身者が最も多く戦死し、住民も共に亡くなった嘉数の丘に建立された。1964 年の建立当時からの嘉数住民と京都の塔関係者による交流が今も続いており、嘉数の丘という「場」は、嘉数住民と京都府民にとって鎮魂と平和を希求する神聖な場となったことを明らかにした。また、その「場」に創出された京都の塔の慰霊空間は、京都文化の粋を極めた石庭のように清貧で無駄がなく（写真参照）、石碑には、戦争の記憶を未来へとつなぐ京都と嘉数の人たちの絆の大切さが書き表されていた。このような表現は他の都道府県の塔にはなく独自性があった。記憶の継承のためには「戦争の現場と今につながる手掛かり」がある方がより理解も深まる。本研究を通じ「その場につながる手掛かり」としての慰霊碑の存在と地元住民との交流の有無が記憶継承の機能を左右することを明らかにした（奥谷 2019）。

研究分担者の浜井は、主に 1960 年代における戦没者の遺骨収容及び墓参問題の展開について、外務省外交史料館や沖縄県公文書館、国立国会図書館憲政資料室等での史料調査や、サイパン・テニアンにおけるフィールドワークを通じて明らかにした。1950 年代に日本政府は「象徴遺骨の収容」方針に基づいて、ごく一部の遺骨の収容をもって全般的な収容が終了したとみなしたが、1960 年代に入り遺族や戦友たちが現地の「遺骨のざらし」状況を目の当たりにしたことをきっかけに遺骨収集団の派遣を再開した。しかしその後政府は事業継続に消極的な姿勢をとり、結果として今日なお多数の遺骨が現地に散在する状況を招いた（浜井 2018）。また、遺骨収容問題と並行して、1960 年代にはソ連地域や北方領土、小笠原諸島などへの墓参をめぐる問題が米ソ冷戦や領土問題というハイレベルな外交関係と絡み合いながら展開したことを明らかにした（浜井 2017）。これらの研究を踏まえつつ、沖縄慰霊問題に関連し、1968 年にサイパンとテニアンを訪問した沖縄出身の南洋群島引揚者による戦後初の「慰霊墓参団」の派遣経緯について検討した。その成果として、本土復帰前に計画された当該派遣団の性格が、日米関係の文脈で変容したことを明らかにするとともに、その歴史的意義について戦後日本の海外戦没者慰霊の文脈に位置づけた（浜井 2019）。

（４）研究④「沖縄の戦没者慰霊を歴史・地理に位置づける」に関する成果

研究④は、地理・歴史・人という視点から沖縄の戦没者慰霊を総合的にとらえることが目的となる。これらは研究会にて各自の報告を議論することで深めていった。特に沖縄で開催した 2 度の研究会（2017 年度、2018 年度）では、研究メンバー以外の参加者を募り、公開型の研究会としたことで、多様な視点からの意見を交換することができた。そうした成果は、これまでにあげた論文中にも　反映されており、再論はしない。むしろ、ここでは成果から導き出された課題をあげ、今後の指針としたい。

地理的な視点からは、沖縄内部の差異をより明確に把握するためのさらなる調査が必要であ

ること、そして南洋諸島の慰霊史を地域の歴史の中で読み解くことが課題としてあがった。
　歴史的な視点からは、戦前の英霊祭祀と戦後の慰霊・追悼との連続性・断絶性をさらに明確にする必要があること、災害や交通事故など、戦争以外の死者慰霊との接続を図ることがあがった。
　人の視点からは、慰霊碑の建立をめぐってのキーパーソンについて、もしくは主体間のせめぎ合いについての検討について、これまでは県レベルの検討が多かった。今回、地域レベルのキーパーソンや主体についても焦点を当てたが、こうした取り組みをさらに進めることが重要であることが浮かび上がった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　19　件）
井口　学、沖縄戦戦没者の葬法をめぐって―沖縄戦証言集を中心に―、京都府立大学文化遺産叢書 15、査読無、2019、87-96
伊集守道・鈴木悠、尚典の葬送について、京都府立大学文化遺産叢書 15、査読無、2019、71-86
上杉和央、兼城区所在の慰霊碑、南風原町、査読無、2018、66-71
上杉和央、沖縄県八重瀬町の戦没者慰霊空間、人文地理 70、査読有、2018、457-476
上杉和央、白梅之塔の記憶―慰霊祭・同窓会―、糸満市、査読無、2019、75-76
上杉和央、糸満市旧兼城村域の慰霊碑、京都府立大学文化遺産叢書 15、査読無、2019、140-147
上杉和央、座間味村の慰霊史に関する調査ノート、京都府立大学文化遺産叢書 15、査読無、2019、148-152
奥谷三穂、沖縄戦における嘉数地区での住民の様子と嘉数高台周辺の慰霊碑調査、八重瀬町、査読無、2017、56-64
奥谷三穂、慰霊碑建立の場と記憶継承のあり方に関する調査―嘉数高台公園の慰霊碑を中心に―、南風原町、査読無、87-119
奥谷三穂、慰霊の記憶の継承における「場」と交流のしくみ―「沖縄京都の塔」から―、京都府立大学文化遺産叢書 15、査読無、2019、109-139
川瀬貴也、琉球・沖縄仏教研究史について、八重瀬町、査読無、2017、48-55
川瀬貴也、沖縄県の仏教の宗派を越えた活動について、南風原町、査読無、2018、78-83
川瀬貴也、新日本宗教団体連合会（新宗連）の沖縄における平和活動、糸満市、査読無、2019、60-63
浜井和史、冷戦下の慰霊と外交―1960 年代の墓参問題を中心に―、軍事史学、査読有、2017、87-106
浜井和史、旧帝国圏における日本人戦没者の遺骨処理問題―『国の責務／責任』に関する歴史的考察―、戦争社会学研究 2、査読有、2018、181-201
浜井和史、復帰前沖縄の南洋群島引揚者による『慰霊墓参団』派遣問題、京都府立大学文化遺産叢書 15、査読無、2019、97-108
藤本仁文、1901 年尚泰の葬儀執行に関する決定過程、八重瀬町、査読無、2017、42-47
藤本仁文、尚泰の葬儀執行をめぐる奉公人の証言、南風原町、査読無、2018、84-86
藤本仁文、明治三四年尚泰の葬儀と旧琉球王国、京都府立大学文化遺産叢書 15、査読無、2019、54-70

〔学会発表〕（計　3　件）
UESUGI Kazuhiro, The memorial space and ‘ home ’: the landscapes in the battlefield of Okinawa, Japan, 第 17 回国際歴史地理学会（国際学会）、 2018 年 7 月 16 日,ワルシャワ大学
浜井和史、せめぎ合う慰霊空間―英霊と遺骨帰還をめぐる相剋―、人文地理学会第 123 回地理思想研究部会、2016 年 11 月 12 日、京都大学
藤本仁文、明治 34 年尚泰の葬送と旧琉球王国、日本史研究会近世・近代合同部会、2018、機関紙会館

〔図書〕（計　1　件）
上杉和央編、『京都府立大学文化遺産叢書 15　沖縄の宗教・葬送儀礼・戦没者慰霊』京都府立大学歴史学科、2019

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：浜井和史
ローマ字氏名：Hamai Kazufumi
所属研究機関名：帝京大学
部局名：総合教育センター
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：20614530

研究分担者氏名：川瀬貴也
ローマ字氏名：Kawase Takaya
所属研究機関名：京都府立大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：30347439

研究分担者氏名：藤本仁文
ローマ字氏名：Fujimoto Hitofumi
所属研究機関名：京都府立大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：90580580

(2)研究協力者
研究協力者氏名：井口　学
ローマ字氏名：Iguchi Manabu

研究協力者氏名：伊集守道
ローマ字氏名：Iju Morimichi

研究協力者氏名：奥谷三穂
ローマ字氏名：Okutani Miho

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。